

(財)みずほ教育福祉財団

特別支援教育研究助成事業

特別支援教育研究論文

—平成19年度—

地域のニーズと資源に応じた特別支援学校の
センター的機能のあり方に関する研究

北海道紋別養護学校ひまわり学園分校

仙北谷 逸生(代表)

平成20年3月

研究協力：国立特別支援教育総合研究所

地域のニーズと資源に応じた特別支援学校のセンター的機能の在り方に関する研究

～ 子ども・保護者を支えていくネットワークの構築を中心に ～

北海道紋別養護学校ひまわり学園分校 仙北谷 逸 生

要旨：特別支援教育が本格的にスタートし、特別支援学校としても地域においてセンター的機構が、今まで以上に求められている。それとともに、子ども・保護者を支えていくネットワークの必要性がでてきている。

筆者の勤務する北海道紋別養護学校ひまわり学園分校（以下本校）では、平成16年度より「一緒に考えていきましょう」を合言葉に教育相談・支援活動を地域に向け行ってきた。その活動を通して地域にある関係機関とのつながりも増えてきた。また本校が地域の小中学校や関係機関から教わることも多くあり、お互いに連携協力していく相互支援という視点も生まれてきている。こういったことから、特別支援学校のセンター的機能を考えていく際に、地域にある関係機関との連携は欠かせない点と考えられる。

昨年度、独立行政法人国立特殊教育総合研究所（現 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所）での長期研修において、「センター的機能の充実」を図るために「盲・聾・養護学校が地域においてどういった役割を担うことができるか～子ども・保護者を支えていくネットワークを中心に～」をテーマとし研究を行った。本研究は昨年度の研究における考察をもとに、今年度、実際に活動を行うことによって実証していくことを目的として研究を行ってきた。具体的には本校における研修会、各関係機関の有志による学習会・サマーキャンプといった活動を通し、また、研修会、学習会においてのアンケート調査の結果も含め、特別支援学校のセンター的機能並びにネットワークの構築を考えていくとともにセンター的機能について考察していく。

キーワード：センター的機能、地域、ネットワーク、子ども・保護者

はじめに

平成19年度を迎え、各学校、地域において特別支援教育が名実ともにスタートし、特別支援学校においても、地域でのセンター的機能が今まで以上に期待されている。特別支援学校のセンター的機能としては

- ① 小・中学校等の教員への支援機能
- ② 特別支援教育に関する相談・情報提供機能
- ③ 障害のある幼児児童生徒への指導・支援機能
- ④ 福祉、医療、労働などの関係機関等との連絡・調整機能
- ⑤ 小・中学校等の教員に対する研修協力機能
- ⑥ 障害のある幼児児童生徒への施設設備等の提供機能

が求められている。

センター的機能が充実することにより、保護者の不安が少しでも解消され、子ども、保護者が安心し

て生活していけるようになることが大切な点であると思われる。また、センター的機能の充実のためには特別支援学校だけではなく保育所、幼稚園、各学校、そして療育機関をはじめとする各関係機関との連携は欠かせない点であり、また、一緒に考えていくことが必要であると思われる。特別支援学校も地域の一つの資源であり、「子ども・保護者を支えていくネットワークの構築」が今まで以上に大切な点になってくると考えられる。

今年度、（財）みずほ教育福祉財団の研究助成をいただき実際の活動を通しての研究が行えることとなった。昨年度、独立行政法人国立特殊教育総合研究所（現 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所）での長期研修においての考察をもとに、今年度実際の活動を行うことによって実証していければと考え研究を行ってきた。

本研究が少しでも今後役に立つものになっていけばと思う。

目 次

要 旨	1
はじめに	1
第1章 研究の目的及び方法	3
1 昨年度の研究	3
2 目 的	3
3 方 法	3
第2章 地域の現状	4
第3章 具体的な取り組み	6
1 研修活動 ～アンケート調査から～	6
2 有志学習会 ～アンケート調査から～	11
3 サマーキャンプの実施	14
第4章 研究のまとめと今後の課題	20
おわりに	21
引用参考文献	22
資 料	23
・長期休業中における自主研修アンケート	
・学校公開・研修会アンケート	
・有志学習会アンケート	

第1章 研究の目的及び方法

1 昨年度の研究

筆者は昨年度、独立行政法人国立特殊教育総合研究所（現 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所）での長期研修において、所属校のある、北海道網走管内における現状を整理するとともに、「センター的機能の充実」を図るために「盲・聾・養護学校が地域においてどういった役割を担うことができるか」を探究していった。さらには主に就学前並びに就学期における「子ども・保護者を支えていくネットワークの構築」について考え、次年度以降に活用していくことを目的とした研究を行った。考察の中で以下にあげる三つの柱を示した。

(1) 「支援からのネットワーク」

初めから新たな組織を作っていくのではなく、実際の支援を通して、今あるシステムを有効に使い、必要が出てきた際に新たな組織を作っていく。その積み重ねがネットワークにつながっていくと思われる。

方法として以下の考察を行った。

- ① 既存の資源の見直し及び活用。
- ② 実際の支援を通して必要な医療機関と連携、また、子どもを真ん中にした療育機関との連携強化。
- ③ キーマンとなりうるのが特別支援教育コーディネーターであり、個別の教育支援計画は子どもを支えていくためのツールとして活用していく。
- ④ 研修会やシンポジウム等を通して機関同士の関係作りがなされ、そこから実際の支援につながり、ネットワークに結びついていく。

こうした方法を通して、ネットワークを構築していくことが大切である。

(2) 特別支援学校のセンター的機能の充実を図っていく上で大切な点

支援を通したネットワークシステムを構築していく中、今後、特別支援学校がセンター的機能の充実を図る上で、地域の中でどのような役割をしていくべきかについて以下の考察を行った。

- ① 障害をもった子どもへの支援について、就学前並びに就学期において中心となる所を決め、役割分担をしていながら連絡調整を行っていくといった役割分担をしていく。
- ② 特別支援学校は、発達支援センターや保健師との連携を深め、お互いの立場を理解しながら相互支援的な視点をもつことによって、就学前後の移行におけるつながりを太くしていけるのではないかな。
- ③ 特に今後は事例を通した研修を行うことが大切。
- ④ 実際の支援活動については学習レディネスについてと、将来的な社会自立も視野に入れたプログラムを一緒に考えていながら提示していく。

(3) 「新しい視点」

「一生涯の支援」という視点を大切に、インターネットを活用した情報通信ネットワークの活用、及び郡部の養護学校ということを踏まえた総合養護学校的な視点からの地域との連携について、今後考えていくことが大切であると思われる。

今年度の研究は特別支援学校のセンター的機能並びにネットワークの構築について、どのような方法が有効であるかを、昨年の研究をベースに実際の活動を通して取り組んでいく。

2 目的

昨年度の研究成果を踏まえ、「子ども・保護者を支えていくネットワークの構築」をしていくためにどのような方法が有効であるかを実際の活動を通して検証していくことを目的とする。

3 方法

- (1) 昨年度の研究の考察をもとに活動を行う。具体的には研修会・学習会・サマーキャンプの活動を通してネットワークの構築を考えていく。
- (2) 研修会、学習会において、アンケート調査を行い、センター的機能の一端を考えていく。

第2章 地域の現状

1 北海道遠軽地区の現状

網走管内には子どもを支えていく多くの組織があり、特に就学前は発達支援センターが中核、保健師がキーパーソンとなっている。本校のある遠軽地区では就学前の段階において、各種健診並びに相談、遊びの教室等々によって早期発見並びに発達支援センターや各種サービスの利用によって早期療育のシステムが整っている。また、必要に応じて幼保との連携もとれ、関係者が集まったの支援会議も行われるケースもある。

しかし昨年度行った聞き取り調査の中で「今ある組織がうまく機能しきれていない」「教育・福祉それぞれで別々の活動をしているという感が否めない」といった意見もあり、こういった既存の地域資源が上手く活用されていないとのことも考えられた。また、3歳児健診のあとは、特に設定がなく、保育所、幼稚園や町の親子教室等以外は気づきの場所がないことが多い現状である。発達障害のお子さんの場合は、就学前後におけるジョイント部分の課題が多く、その結果就学前の支援が就学後に継続されにくい状況でもある。

今年度から本格化した特別支援教育の充実を考えていくと、今後、特別支援学校においては教育相談・支援件数の増加にともない、人的な面、財政面、時間的な面等、厳しい状況になってくることが考えられる。センター的機能の充実を考えていく上では、地域資源を洗い出し、それぞれの機関の役割を確認していきながら有効に活用していく方法を考えていくことが大切であると思われる。また、特別支援学校に地域がどのようなことを期待しているかを把握していくことも引き続き大切であると考えられる。

以下の図は昨年度の研究において行った、アンケートの「将来地域において盲・聾・養護学校に期待する点について」の結果を、回答の多い順に並べ替えたものである。

質問が同じでないため、一概に比較することはできないが、市町村教育委員会、小中学校、発達支援センターにおいて共通して多いのが、子どもたちの

ニーズの把握、指導支援方法についてのアドバイスといった、実践的なことについて求められていることがわかる。また、個別の指導計画、個別の教育支援計画（個別の支援計画）関連、研修会の案内や研修会講師並びに特別支援教育等の情報提供についても高い結果となっている。一方で、施設の利用や教材教具の貸し出し、放課後支援や長期休業中の支援

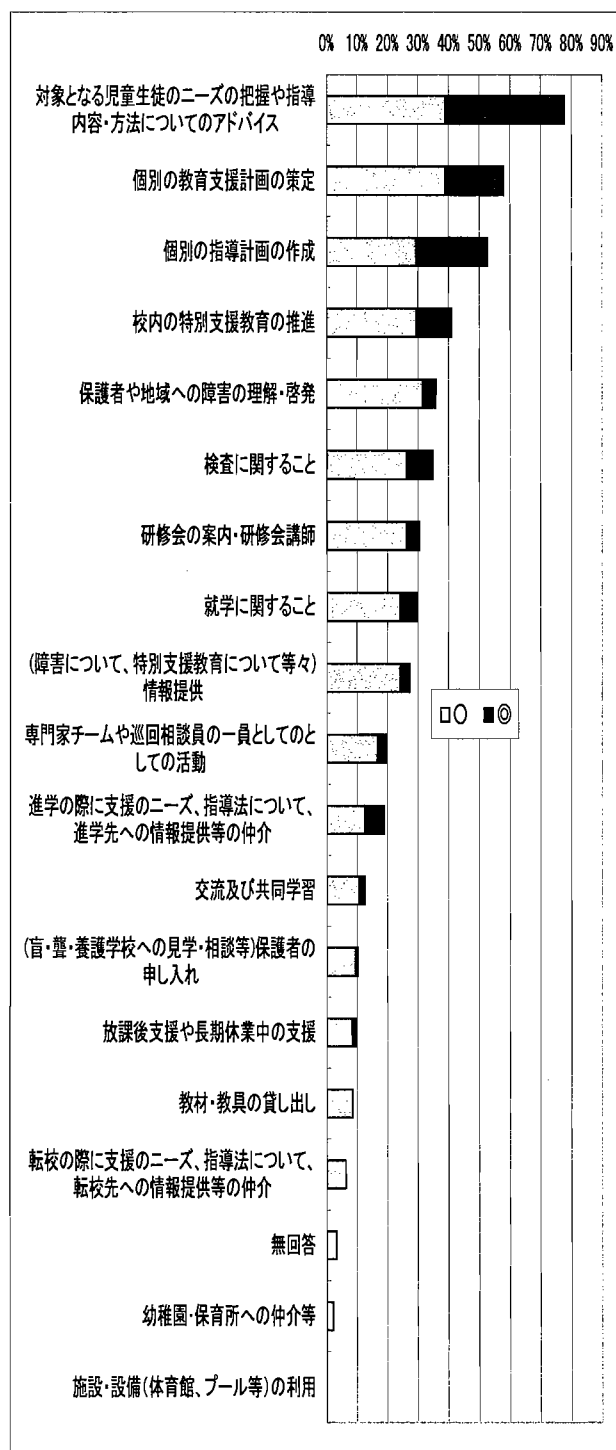


図1 将来盲・聾・養護学校に期待する点
(最も重要な点は◎) 教育委員会

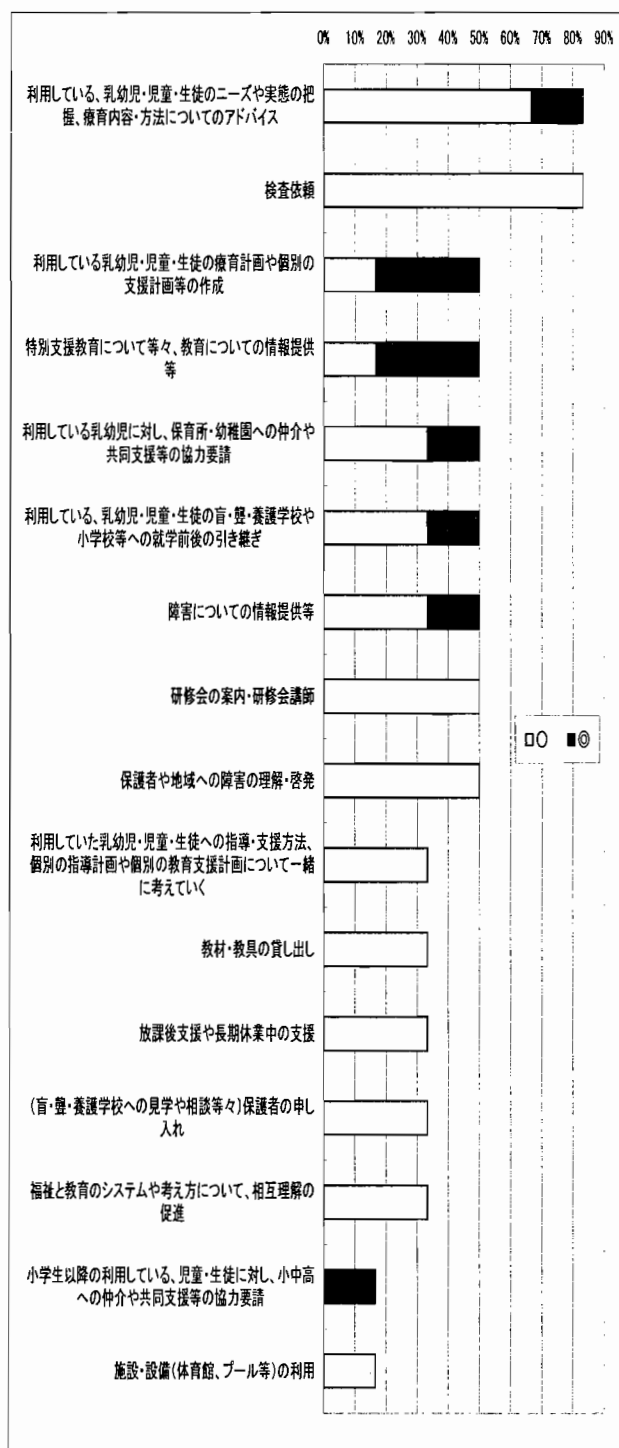


図2 将来盲・聾・養護学校に期待する点
(最も重要な点は◎) 小中学校

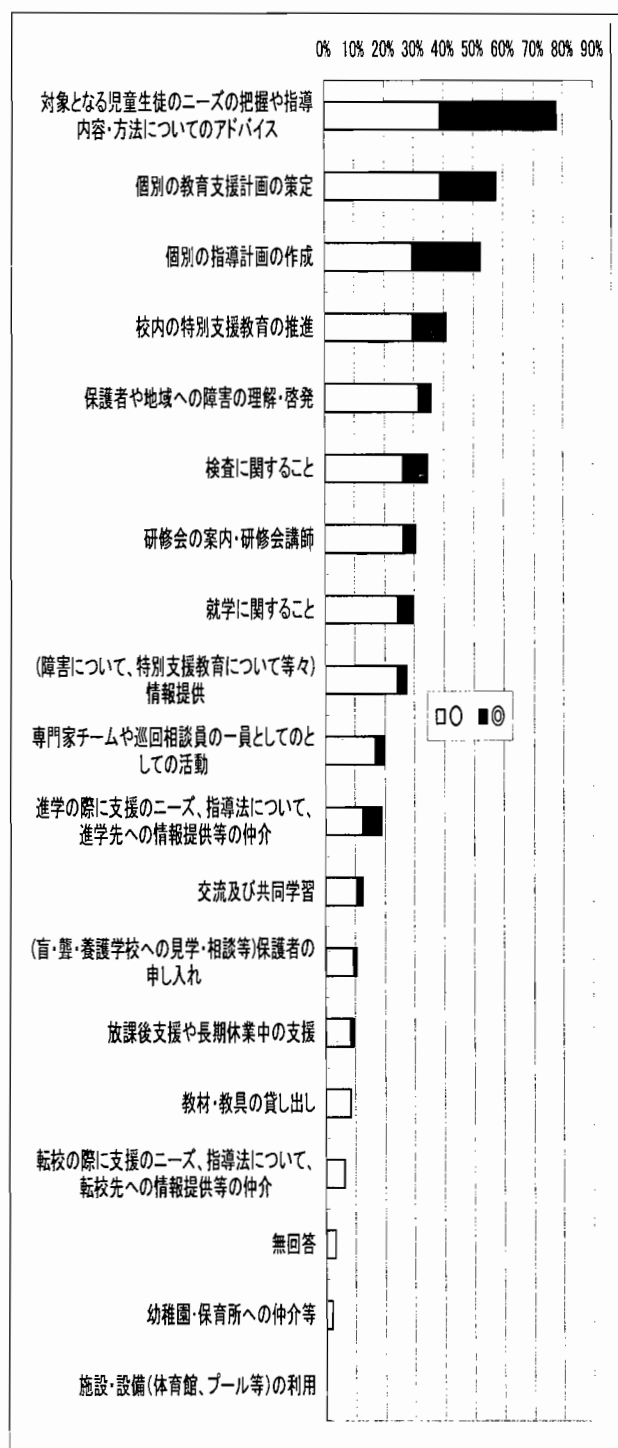


図3 将来盲・聾・養護学校に期待する点
(最も重要な点は◎) 発達支援センター

に関してはそれほど多くはなかった。

本校では平成16年度より教育・相談支援部を中心に特別支援教育に関して本格的に取り組んできている。「機能するネットワーク」ということを考えていくと、こういったニーズを把握しての取り組み、そして地域にある機関とのネットワークは欠かせないことがわかる。

今後こういった地域資源を洗い出し、それぞれの機関の役割を再確認していきながら、有効に活用していく方法を考えていくことは今後も必要な点と思われる。

第3章 具体的な取り組み

1 研修活動

昨年度のアンケート調査からも、今後特別支援学校に期待する点として子どもたちのニーズの把握、指導支援方法についてのアドバイス、研修会も含めた各種情報提供が多かった。特別支援学校がセンター的機能を充実させていくにはこういったニーズに応えていく必要があると考えられる。また、特別支援学校だけではなく地域全体の専門性を高めていくためにはこのような研修会は欠かせないものと考えられる。

今年度本校では、地域に向け、8月に夏季研修会、10月に公開授業・研修会を行った。この2つの研修会、公開授業・研修会において更なるニーズを確認し、今後につなげていくことを目的として、それぞれの参加者にアンケート調査を行った。

ここでは結果を示すとともに必要に応じて項目毎に考察を加えた。

(1) 夏季研修会

本校では夏季休業中に地域に向けた研修会を行っている。今年度は特別支援教育が各学校において本格的にスタートした中、実践に役立ててもらえる内容を考え行った。

講師として北海道教育大学釧路校二宮信一准教授をお招きし、「支援を必要とする児童生徒への理解と具体的支援」(図4)について講演していただいた。

地域から多くの方々が参加され関心の高さがうかがえる研修会となった。

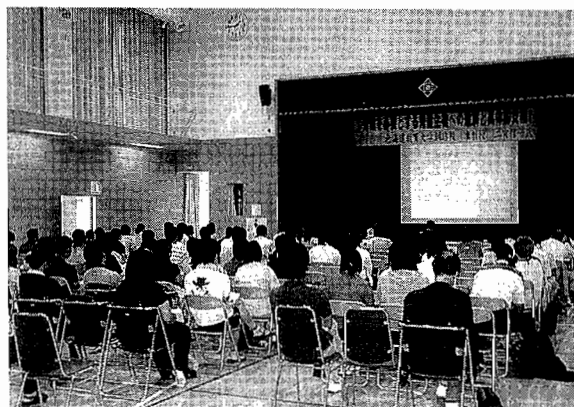


図4 夏季研修会

(1)-1 アンケート結果 <有効回答数 77>

① 参加者の所属について

アンケートに答えてくれた参加者の所属について尋ねた結果を図5に示した。

「イ 小学校関係者」が最も多く43%、次いで「ア 盲・聾・養護学校（特別支援学校）関係者」が40%、「ウ 中学校関係者」が9%という結果であった。「ア 盲・聾・養護学校（特別支援学校）関係者」については本校職員も含めているため多い結果となっている。

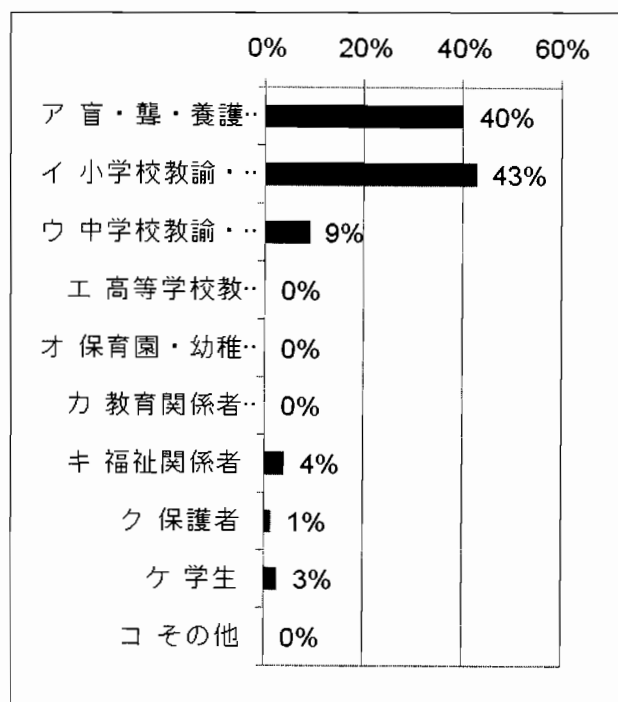


図5 参加者の所属

② 何でこの研修会を知ったかについて

この研修会を何で知ったかについて尋ねた結果を図6に示した。

研修会の案内については郵送、FAX、とともにメールを使って案内を送信した。また、本校とつながりのある各関係機関にお願いをし、研修会の案内をそれぞれ関係するところに連絡してもらった。

アンケート結果では「ア ひまわり学園分校からの案内で」が最も多く74%、次いで「イ 所属先の掲示板等で」が10%「ウ 関係者からの紹介」が8%となっている。

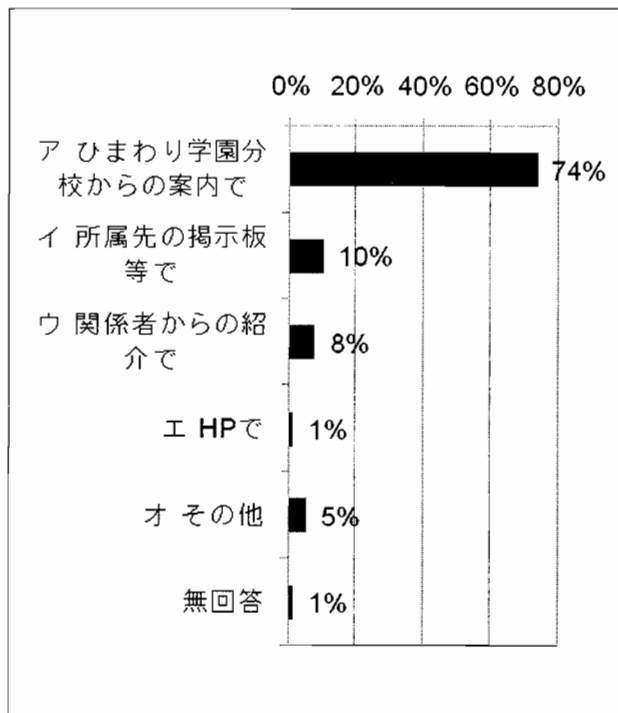


図6 何で研修会を知ったか

③ 遠軽・紋別地区で研修会の必要性について

遠軽・紋別地区における研修会の必要性について尋ねた結果を図7に示した。

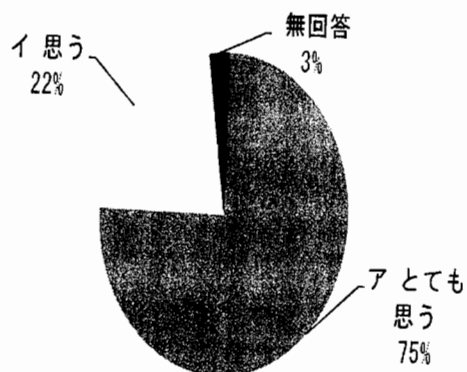


図7 遠軽・紋別地区で研修会は必要か

「ア とても思う」が75%、「イ 思う」が22%でありアンケートに答えてくれた参加者の97%が研修会は必要という結果であった。自由記述の中に「紋別は支援を必要としている子供が多いように感じています。」

（紋別に勤務しています）ですからこのような研修を行ってほしいととても強く思っています。」という必要性の高さがうかがえる意見もあった。

④ 今後どのような研修会を期待するか

今後、どのような研修会を期待するかについて、12の選択肢の中からあてはまるもの全てを選択するように尋ねた結果を図8に示した。

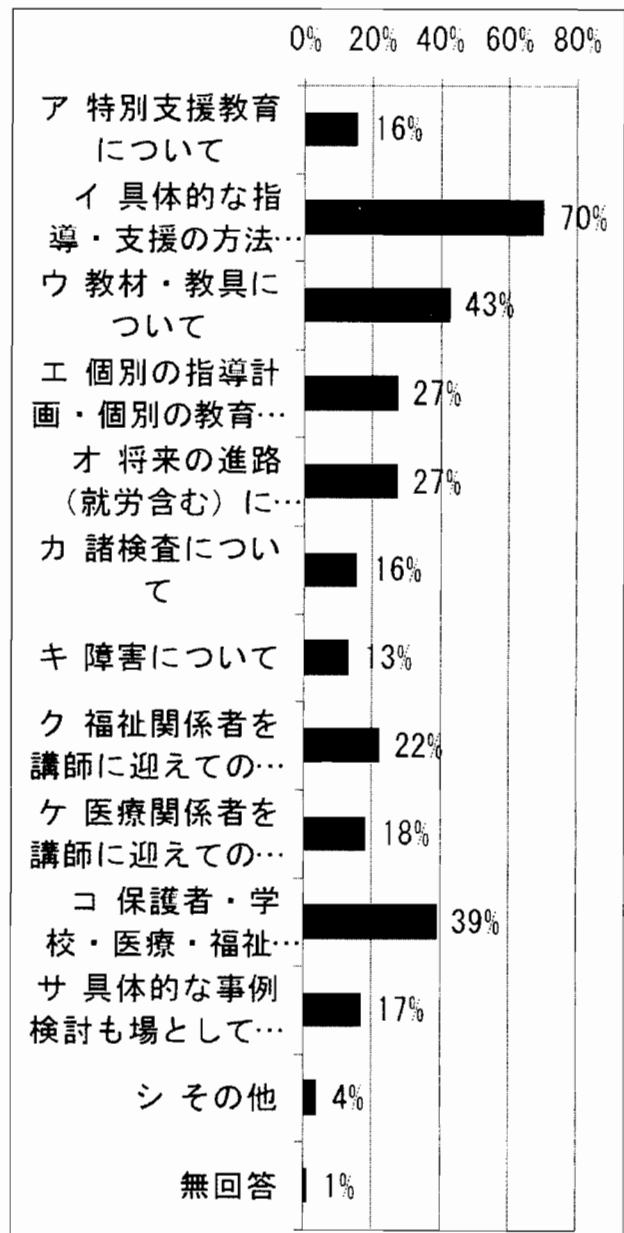


図8 今後どのような研修会を期待するか
（複数回答可）

「イ 具体的な指導・支援の方法について」が最も多く70%、次いで「ウ 教材・教具について」が43%、「コ 保護者・学校・医療・福祉等々、関係機関との連携の方法について（シンポジウム含む）」が39%、「エ 個別の指導計画・個別の教育支援計画について」「オ 将来の進路（就労含む）について」が27%という結果となった。「ア 特別支援教

育について」は16%と低く、上位2つの結果からも実際の指導・支援に使える内容を期待していることがうかがえた。

④ 考 察

夏季休業中に行われた研修会のアンケート結果から、遠軽・紋別地区における研修会の必要性とともに、具体的な指導・支援の方法について求められていることがわかった。また、保護者・学校・医療・福祉等々、関係機関との連携の方法について（シンポジウム含む）についても比較的期待されていることがわかり、この地区におけるネットワークの必要性も高まってきていると考えられる。

(2) 公開授業・研修会

今年度本校では、地域に向け授業について忌憚のないご意見や助言をいただき、今後の授業実践に活かしていくことをねらいとした、公開授業を行っている。また、同時に教育相談会、研修会も開催した。

研修会については、夏季研修会の際に行ったアンケート結果をもとに、内容を吟味していった。今後期待する研修として意見が多かった「具体的な指導・支援の方法について」「教材・教具について」をふまえ実践にすぐ役立つ内容とし、北海道札幌養護学校もなみ学園分校平秀司先生をお招きして「すぐに役立つ歌遊び指導」について、教材・教具を使った指導・支援方法について講演していただいた（図9）。

アンケート結果については、アンケートの設問全てではなく、今回の研究に関連のある部分を一部抜粋し、考察していくことにする。

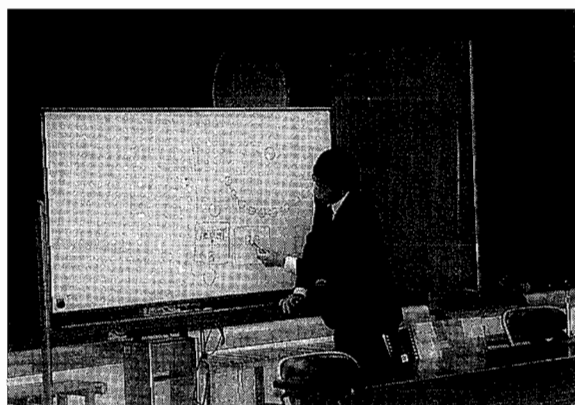


図9 公開授業・研修会

(2)-1 アンケート結果 <有効回答数 26>

① 参加者の所属

アンケートに答えてくれた参加者の所属について尋ねた結果を図10に示した。「イ 小学校関係者」が最も多く54%という結果となった。

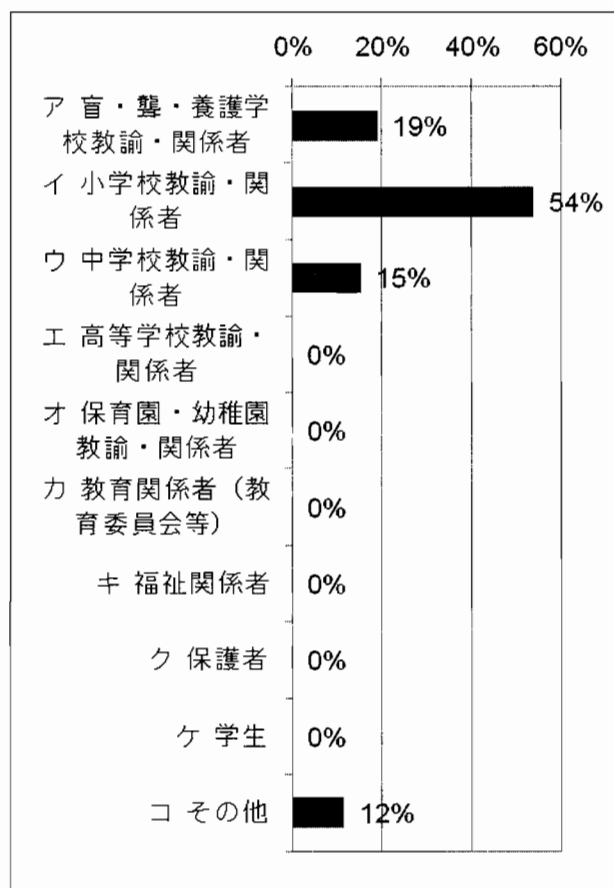


図10 参加者の所属

② 何で公開授業・研修会を知ったか

この研修会を何で知ったかについて尋ねた結果を図11に示した。

夏季研修会同様、研修会の案内については郵送、FAX、とともにメールを使って案内を送信した。また、本校とつながりのある各関係機関にお願いをし、研修会の案内をそれぞれ関係するところに連絡してもらった。

「ア ひまわり学園分校からの案内」が最も多く75%という結果となったが、「エ HP（ホームページ）」が0という結果である。本校はHPの更新が不規則であり、情報提供の媒体となっていない状況であることが考えられる。特別支援学校に求められるセンター的機能の中に情報の提供ということがあ

ることを考えていくと、HPの果たす役割は大きいと思われる。早急な改善が必要であると思われる。

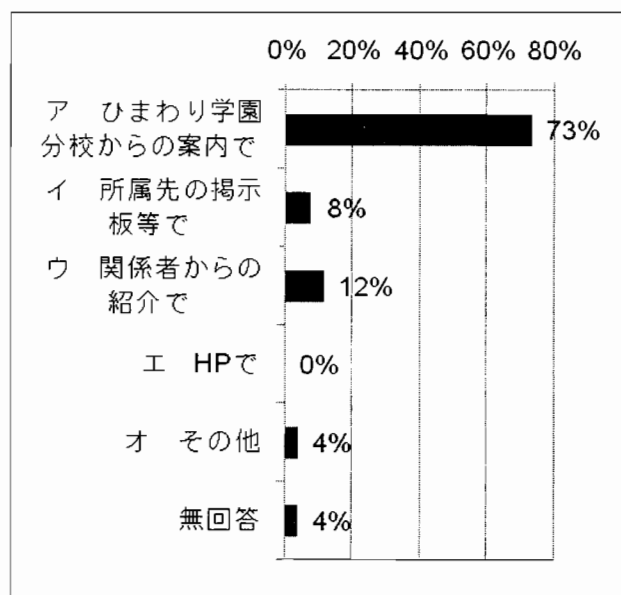


図11 何で公開授業・研修会を知ったか

③ 公開授業・研修会の同一日程開催について

今年度は公開授業・研修会の同一日程開催について尋ねた結果を図12に示した。

「ア とてもよかった」が35%、「イ よかった」が38%と半数以上の人が同一日程開催についてよかったとの答えであった。授業公開で実際の取り組みを見る、研修会で方法等を聞く、というように同一開催によるメリットがあったと考えられる。

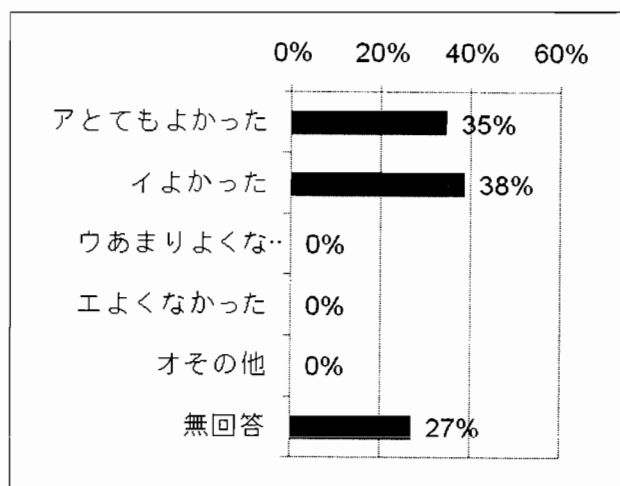


図12 公開授業・研修会の同一日程について

④ 公開授業・研修会の内容について

公開授業・研修会の内容について尋ねた結果を図13に示した。

内容についても「ア とてもよかった」が42%、「イ よかった」が46%と半数以上の人よかったとの答えであった。自由記述の中に「公開授業・研修会ともに自分の授業にヒントになった」「授業・研修会ともに豊富なアイディアとそれを実践に結びつける先生方の努力に強い感銘を受けました」等の意見もあった。

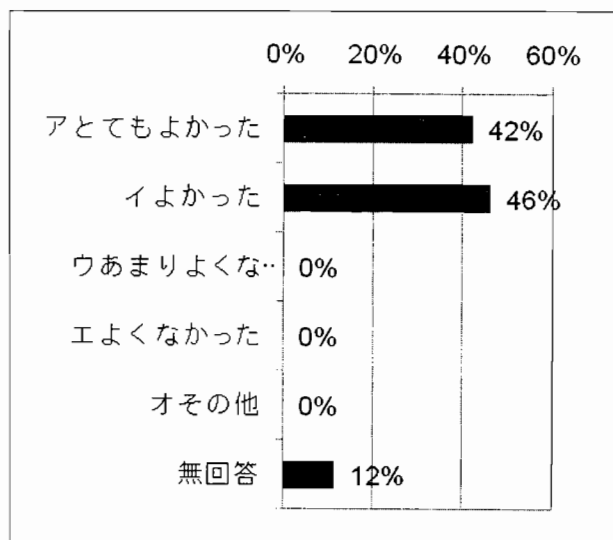


図13 公開授業・研修会の内容について

⑤ 遠軽・紋別地区で研修会の必要性について

遠軽・紋別地区における研修会の必要性について尋ねた結果を図14に示した。

「ア とても思う」が61%、「イ 思う」が27%であり、約9割がこういった研修会を必要としていることがわかった。

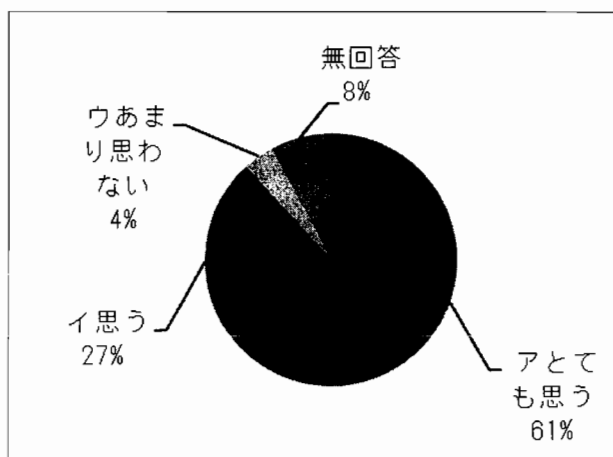


図14 遠軽・紋別地区で研修会は必要か

⑥ 今後どのような研修会を期待するか

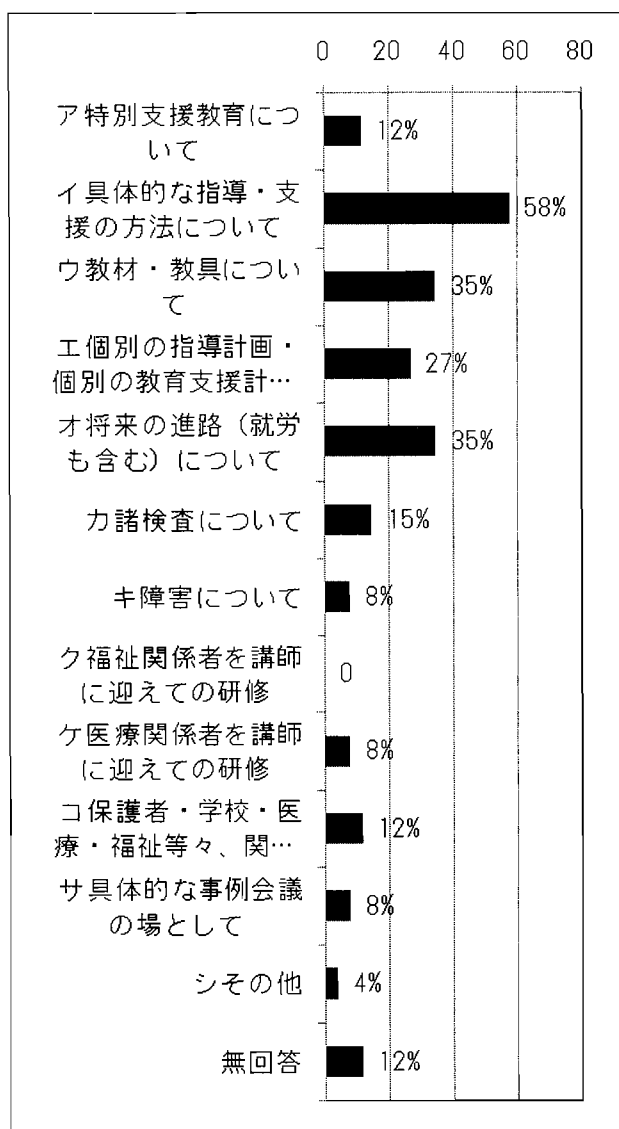


図15 今後どんな研修会を期待するか
(複数回答可)

今後、どのような研修会を期待するかについて、12の選択肢の中からあてはまるもの全てを選択するように尋ねた結果を図15に示した。

今後どのような研修を期待するか問いに対しては「イ 具体的な指導・支援の方法について」が58%、次いで「ウ 教材・教具について」「オ 将来の進路（就労も含む）について」が35%、「エ 個別の教育支援計画・個別の指導計画について」が27%という結果であった。「ア 特別支援教育について」は12%という結果であった。具体的な指導・支援、並びに進路等といった実践から将来にわたっての関心が高まっていることがわかる。

⑦ 考 察

公開授業・研修会のアンケート結果からも遠軽・紋別地区においての研修会の必要性とともに、具体的な指導・支援の方法について求められていることがわかった。

自由記述に「お世話になっています。貴校からのアドバイスで今年は順調に支援・指導ができ感謝しています。」という意見もあった。本校の教育相談・支援活動が少しずつではあるが、確実に地域において実を結んできていると考えられる。また、「なかなか医療機関との連携が難しいです。どのようにしたらうまくいくのかうまくいった例など、医療の立場から教育現場へ訴えたいことなどを知りたいです。」といった意見もあり医療と連携の難しさを感じさせられた。

(3) 研修活動についての総合考察

今年度行った、研修会、公開授業・研修会においてのアンケート結果から、遠軽・紋別地区においての研修会の必要性が高いことがわかった。内容についても「具体的な指導・支援の方法について」「教材・教具について」といったように実践につながる内容が求められていることを改めて確認することができた。

また、関係機関との連携についても少しずつではあるがニーズが高まってきていると考えられる。

夏季研修会のアンケートの自由記述の中に、障害をもつお子さんの保護者の方から次のような意見が寄せられた。『特別支援教育がはじまり「何が変わるだろうか？」と親はまず期待します。それは「子を思う親心」からです。少しでも世の中の空気が（障害をもつ子育てへの理解や支援）かわればと・・・でも現実には研修会に保護者が出られない（案内が届かない、情報が薄い、関心がない等）ものとなっています。いつも思うこと「自分の息子なのに親が知らないことが多すぎる（又、知らないうちに決まっている）です。現実に向けて生きる教育を期待します。』

何のための特別支援教育か、また、何のための研修会かを考え、今後とも取り組んでいくことが大切であると思われる。

2 有志学習会

昨年度の研究における考察の中で、以下のような視点を示した。「全国の行政機関の中には子どもを支援するためのネットワークづくりを目的に、有志が部局を超えて集まり、研修会を企画し行っているところもある。また、現地調査を行った学校の中に、研修の際に事例検討を続けていくことによって、具体的な指導支援につながっていった、また、その事例検討会に参加している機関同士により支援チームができたという例もあった。まさに生きた専門家チームであり、巡回相談であるといえる。

これまでは、複数の目で子どもを見ていくという機会が、あまり多くない状態であった。こうした事例検討を行うことにより、複数の目で子どもを見ることにつながり、子どもに対しての「共通の見立て」の勉強ができることになる。このことが実際の場面において生かされ、さらに具体的な指導支援の手立てにつながり、全体の財産になっていくのではないだろうか。

研修活動を通して、教師（個人）、学校（各機関）それぞれが自信をつけていながら取り組んでいくことが大切であり、そのことがまた、新たな専門性につながっていくと思われる。」

これを踏まえる形で、本校所在地の遠軽地区において、昨年度から福祉・教育関係者が中心となり、職種を超えた有志による学習会を開催している。主に自閉症、発達障害についての学習会であり、月1回テーマを決め行っている。今年度は発達障害のお子さんの事例を継続して取り組んでいくといったこ

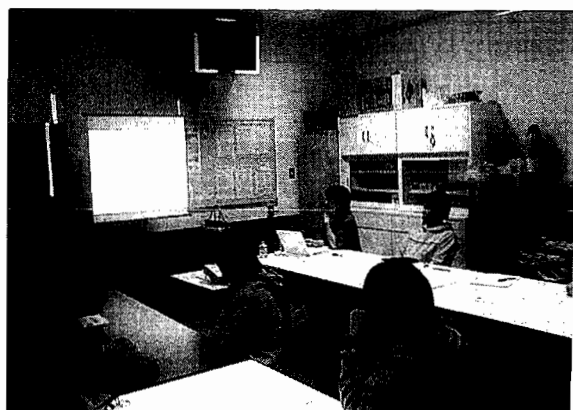


図16 ドクターによる研修会

とも行った。

また、月1回の学習会の他、講師を招いての研修会も行っている。

10月に医大からドクターを招いて、医療の立場からの研修会（図16）、11月に独立行政法人国立特別支援教育総合研究所の斉藤宇開先生をお招きして、自閉症教育について、事例の検討も含め研修会を行った（図17）。

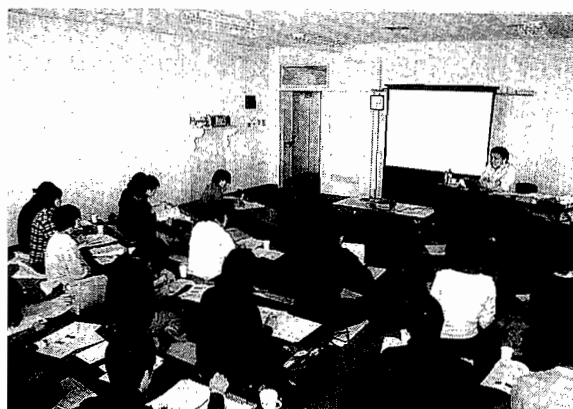


図17 斉藤宇開先生による研修会

こういった有志学習会の意義についてあらためて確認し、今後の活動の参考にしていくことを目的として参加者にアンケート調査を行った。

ここでは結果を示すとともに必要に応じて項目毎に考察を加えた。

(1) アンケート結果 <有効回答数 24>

① 有志学習会参加者の所属

アンケートに答えてくれた有志学習会参加者の所属について尋ねた結果を図18に示した。

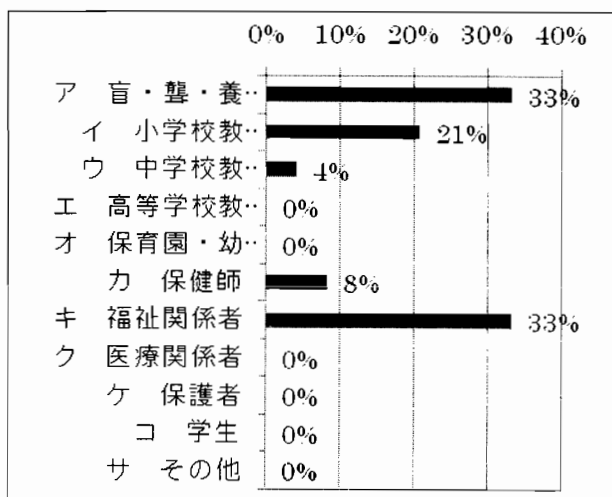


図18 参加者の所属

最も多かったのが「ア 盲・聾・養護学校関係者（特別支援学校）」が8人、「キ 福祉関係者」が8人で同数、次いで「ウ 小学校教諭・関係者」が5人、「カ 保健師」2人という結果であった。

② 何で有志学習会を知ったかについて

有志学習会を何で知ったかについて尋ねた結果を図19に示した。

有志学習会の案内については、事務局を設け事務局から案内をしている。具体的には本校の特別支援教育コーディネーターが各学校に、また、発達支援センターから福祉関係等に研修会の案内プリントを配布していった。

「イ 関係者からの紹介で」と「ウ 職場の紹介で」が38%で最も多く、次いで「ア 案内プリントで」が25%という結果となった。

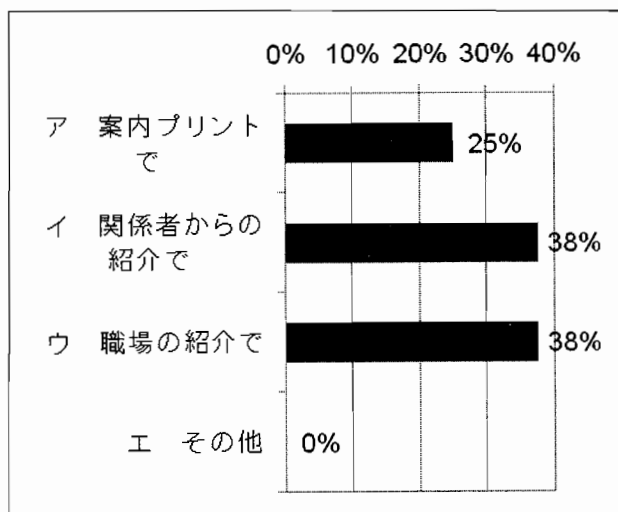


図19 何で有志学習会を知ったか

③ 有志学習会の必要性について

有志学習会の必要性について尋ねた結果を図20に示した。

「ア とても思う」が79%、「イ 思う」が21%でアンケートに答えてくれたすべての人がこういった有志学習会は必要であるという答えであった。

参加者からのアンケートでもあり、一概に評価はできないが、職種を超えこういった学習会が必要とされていることが考えられる。

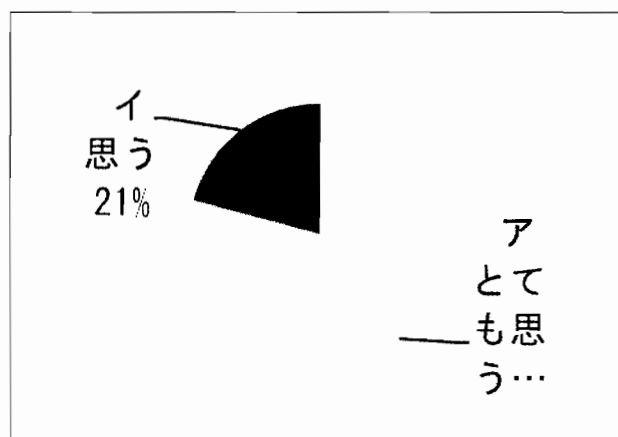


図20 このような有志学習会の必要性

④ 有志学習会の有効な点

有志学習会に参加して有効であった点について8の選択肢の中からあてはまるもの全てを選択するように尋ねた結果を図21に示した。

最も多かったのは「ア 障害の特性について理解

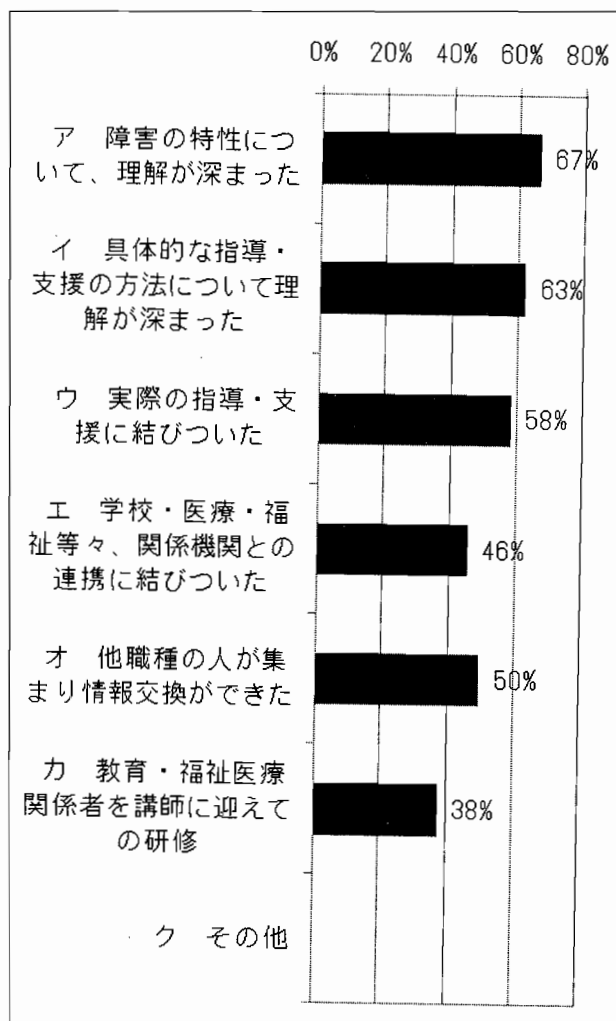


図21 有志学習会が有効な点
(複数回答可)

が深まった」が67%、次いで「イ 具体的な指導・支援の方法について理解が深まった」が63%、「ウ 実際の指導・支援に結びついた」が58%、「オ 他職種の人が集まり情報交換できた」が50%、「エ 学校・医療・福祉等々、関係機関との連携に結びついた」が46%という結果となっている。

有志学習会は参加者のスキルアップが主な目的である。自由記述の中に「理解の深まりだけでなく自分が行っている支援の仕方を見直す良い機会となっています」「健診事後、経観者フォローにおいて障害特性を学ぶことで点ができたこと、保護者への今後の見通しを伝えられるようになった」「具体的にケースを通して障害の特性を学習できたことはとても良かったです」といった意見もあった。「ア 障害の特性について理解が深まった」「イ 具体的な指導・支援の方法について理解が深まった」「ウ 実際の指導・支援に結びついた」が上位3つの結果であったことは、評価できる点と考えられる。

という結果となっている。

有志学習会は参加者のスキルアップが主な目的である。自由記述の中に「理解の深まりだけでなく自分が行っている支援の仕方を見直す良い機会となっています」「健診事後、経観者フォローにおいて障害特性を学ぶことで点ができたこと、保護者への今後の見通しを伝えられるようになった」「具体的にケースを通して障害の特性を学習できたことはとても良かったです」といった意見もあった。「ア 障害の特性について理解が深まった」「イ 具体的な指導・支援の方法について理解が深まった」「ウ 実際の指導・支援に結びついた」が上位3つの結果であったことは、評価できる点と考えられる。

さらには「オ 他職種の人が集まり情報交換できた」が50%、「エ 学校・医療・福祉等々、関係機関との連携に結びついた」が48%という結果については、有志学習会を通し、機関同士の連携のきっかけになってきているということが考えられる。

⑤ 有志学習会の課題点

有志学習会の課題点について8の選択肢の中からあてはまるもの全てを選択するように尋ねた結果を図22に示した。

最も多かったのが「キ 課題点はあまりない」で33%、次いで「エ 開催の日程や、開催時刻について（参加するため）の調整が難しい」が21%、「カ 参加者数が一定でない」が17%、「イ 実際の指導・支援に結びつかない」が8%という結果であった。

有志学習会は基本的に月末の金曜日に本校を会場として開催され、佐呂間、湧別、上湧別、湧別の4町からなる遠軽地区全域から職種を超えた参加者がいる。自由記述の中に「開催日程ですが月末の金曜

日の18:30ではなかなか厳しいものがある」といった意見もあり、今後の課題でもある。

また、参加者数が一定ではない点について、自由記述の中に「継続した内容の場合同じレベルになりにくい」といった意見もあった。

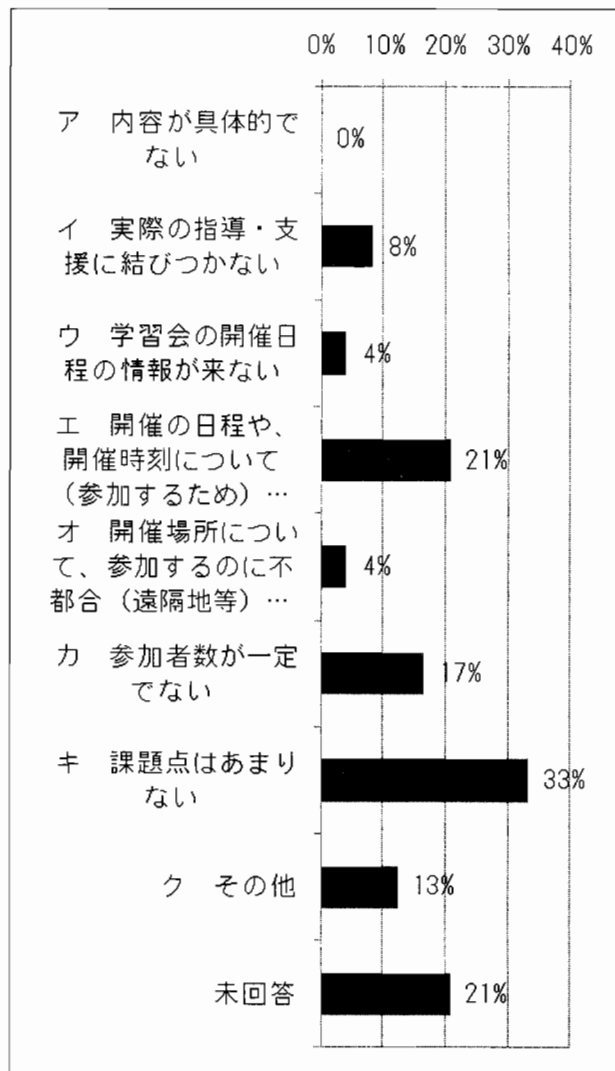


図22 有志学習会の課題点
(複数回答可)

⑥ 今後どのような内容を期待するかについて

今後有志学習会においてどのような内容を期待するかについて14の選択肢の中からあてはまるもの全てを選択してもらった結果を図23に示した。

最も多かったのが「イ 具体的な指導・支援の方法（応用行動分析、動作法等々）について」の63%であった。次いで「ウ 具体的な指導・支援に使われる用具（教材・教具）について」が46%、「エ 諸検査について」「ス 具体的な事例会議の場（ケース会議）として（事例について各関係機関と一緒に

考えていく)」が同数で33%であった。また、「ク 将来の進路（就労も含む）について」「シ 保護者・学校・医療・福祉等々、関係機関との連携の方法について（シンポジウム含む）」が同数で29%という結果であった。ここでも、具体的な指導・支援方法について各機関ニーズの高さがうかがえる結果となっている。

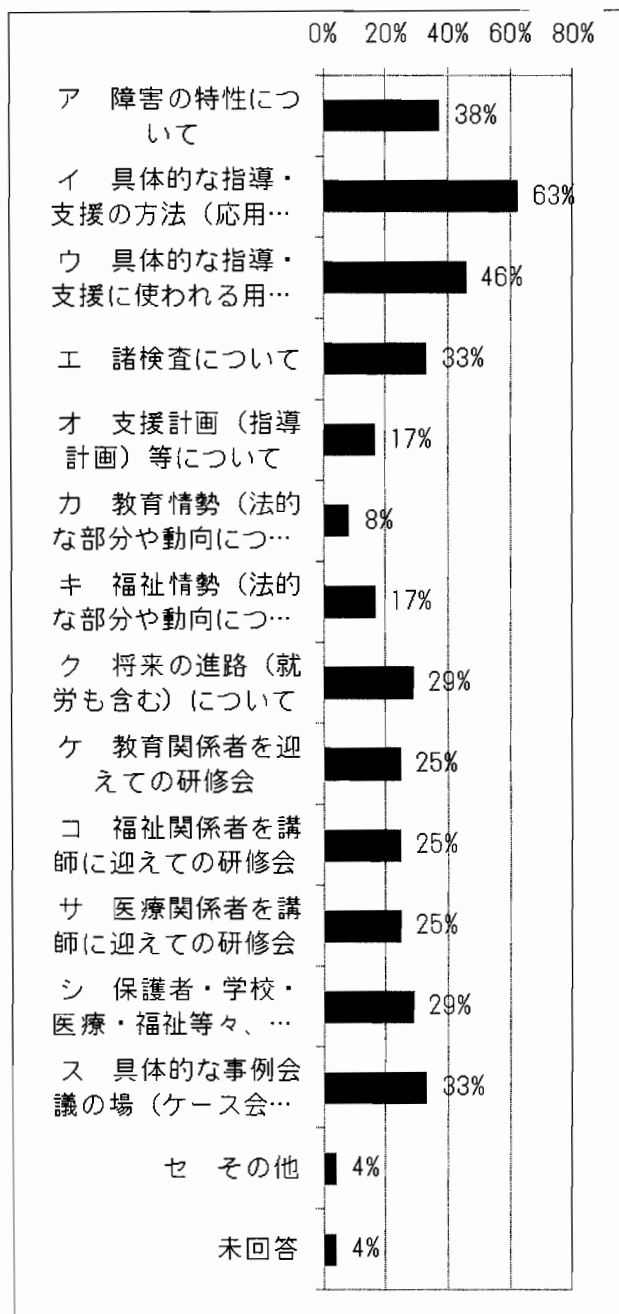


図23 今後どのような内容を期待するか
(複数回答可)

(2) 有志学習会における総合考察

有志学習会においては、参加者のスキルアップを主な目的としている。有効な点として、障害の特性

や、具体的な指導・支援の方法についての理解の深まり、そして実際の指導・支援に結びついたという結果が多かったことから、内容については評価できると考えられる。

この有志学習会は福祉関係者と教育関係者が事務局として運営し、本校の教諭も事務局の一員であり、企画運営並びに会場提供を行っている。こういった取り組みは、特別支援学校におけるセンター的機能としてつながっていくと考えられる。

また、職種を超えた参加者が一緒に学習をしていることにより、人と人とのつながりができ、そのつながりが共同での指導・支援や連絡調整といったように連携する場面も増え、組織と組織のつながりへと続いている例もある。この有志学習会が確実にネットワークのきっかけになっていることも考えられる。

昨年度の研究の考察においてこういった学習会・研修会の必要性についてふれたが、この有志学習会は確実に地域においても意義のあるものになってきていると考えられ、今後も継続して取り組んでいくことが大切であると思われる。

3 サマーキャンプの実施

特別支援教育が本格化していくにしたがって遠軽地区においても、福祉・療育機関と各学校をはじめとする教育機関とのつながりが増えてきている。今後の支援を考えていく中で、子どもを真ん中におき、保護者、支援者が一緒に考えていくことができればとの思いが、遠軽地区での福祉・療育関係者、教育関係者の中で生まれてきた。

そこで、発達障害の子を対象とした、2泊3日のサマーキャンプを企画、実施した。

今回のサマーキャンプでは、

- ・集団生活のきまりやルール、マナーを守り、野外での活動を通し、社会性の向上を図る
- ・学校・地域での暮らしに対応できるたくましい心や身体をはぐくむ
- ・公共の交通機関や公共施設を利用し、生活体験を広げる
- ・保護者、支援者の共通理解を図ると共に、今後の支援に生かしていく

の4つをねらいとして取り組んでいった。その他にも指導・支援者側のスキルアップも目的の一つとしている。

なお、今回は地域で暮らす小学校低学年の3名を対象に行った。

(1) 参加者について

支援者側の参加者としては、遠軽町発達支援センター山田順子指導員を中心に、遠軽、佐呂間町の保健師、北海道紋別養護学校ひまわり学園分校教諭(特別支援教育コーディネーター含む)、北海道帯広養護学校教諭、遠軽町立東小学校教諭、元北見市幼児ことばの教室指導員というように多職種にわたっての参加となった。事前のスタッフミーティングを行い、共通理解を図っていった(図24)。

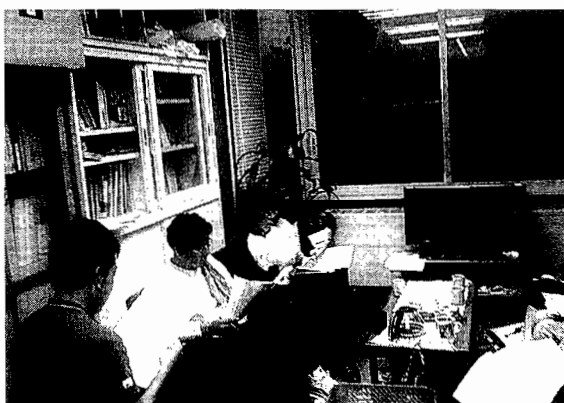


図24 サマーキャンプスタッフミーティング

また、スーパーバイザーとして国立特別支援教育総合研究所の久保山茂樹先生をお招きして、アドバイスをいただいた。

(2) 対象について

今回は初めての取り組みということもあり、一昨年、昨年まで遠軽町発達支援センターに通園していた3名の児童を対象とすることにした。事前に主旨を含め保護者説明会(図25)を開催した。また、支援者、参加児童の顔合わせ会(図26)も実施した。しおりを使って活動内容についての説明を行い、



図25 保護者説明会



図26 事前顔合わせ会

参加児童が見通しをもつことができるように配慮していくとともに、サマーキャンプに向け参加児童の実態を把握し、また、事前に保護者に記載してもらった事前調査書による資料(図27)と合わせ、それぞれの指導の目標を決めていった。

(3) 支援形態について

支援の形態については、一人の児童に対し主に指導・支援を担当するメインと記録を担当するサブの二人組とした。これは異なる職場同士のペアを基本とし、多角的な視点で支援を行っていけるようにした。記録者に関しては、記録(表1)「記録者が考えたこと」という主観もあえて記載してもらい、夜のミーティングの際に利用していけるようにしていった。総合進行は遠軽町発達支援センターの山田順子

ほくの記録

子どもの名前 _____ 生年月日 _____ 平成 ____ 年 ____ 月 ____ 日生

保護者の名前 _____

住所 _____ 電話番号 (_____) _____

緊急連絡先 (親戚・近所など) _____

記入した日 _____ 年 ____ 月 ____ 日
 記入した人 母 父 その他 (____)

【お願い】
 これは、じゃんぼクラブでのお子さまの活動をよりよいものにするために、また、スタッフがより良くお子さまを理解するために大切な資料となるものですから、ありのままをお書きください。記憶の薄れていることも多いでしょうが、思い出しているだけ詳しく書いてください。
 母子手帳や育児日記、当時の記録などがありましたら、もう一度読み返してみるのも良いかもしれませんね。
 項目ごとに〇で囲むものや、記述するものなどありますが、項目に当てはまらなくても、関係したことや気になることや、『こんなことは関係ないかもしれない』と思われることでも、余白などに遠慮なく書いてください。
 記入欄が足りないときは余白にお書きください。
 お書きくださったことについては、かたく秘密を守ります。

図27 事前調査書（一部）

指導員が行った。

メインとサブが異職種ということもあり、時にはそれぞれが違った視点で児童をとらえていることもあったが、そのことが逆に、幅の広い支援につながっていったと思われる。

(4) 日程・内容について

1 日目

- 1 はじまりの会
- 2 じゃんぼタイム①（荷物整理）
- 3 じゃんぼタイム②（記念撮影）
- 4 じゃんぼタイム③（探検・施設の把握）
- 5 じゃんぼタイム④（ゲーム大会）
- 6 夕食
- 7 じゃんぼタイム⑤（工作）
- 8 入浴・就寝

表1 サマーキャンプの記録（抜粋）

スケジュール・時間	本人が言ったこと・行ったこと	支援者の発言・援助内容	本人の反応	本人の特徴 記録者が考えたこと
Jタイム③ ・マップに部屋の名前を貼りながら、きららん清里を探索する。	・（探検する場所ごとに、封筒から名前シールを出して、しおりに貼る）シールをはがすのが難しい。裏返したシールを表にするなどシールを広げるのに時間がかかる。 ・広げたシールを紙にのせて、封筒に入れようとしている。「ジャンボ先生がやっていたから」。封筒にシールを入れようとしているが、封筒から出てしまう。 ・「トイレのシールをキープしておこう。」次に貼るシールをキープしている。	M：「これは大変だね」シール広げてあげ、見てあげる。 M：封筒に入りやすいように見本を見せる。 M：失敗した原因について見本を見せて、教えてあげる。 ほめる。	1 日目ミーティングできないことに対して、困っていることを言葉に出してあげる。本人の気持ちを理解していると本人に示すことが大事。例えば、「そっかあむずかしいんだね。」など 場所ごとに、シールを封筒に戻すときには、紙を丸めて封筒に入るようにするが、失敗することもある。 成功	「先生がやっていたことを覚えている。 次のことを予測して考えることもできるんだ。でも、ポケットに入れたことを忘れないだろうか。 実際に見て、確認するとよかったのかな。
Jタイム④ゲーム ・てんとう虫じゃんけん ・ZINGO	・てんとう虫じゃんけんでさいころを振るときにとめないでやるためにさいころが表に向かない。 ・「やり方がわからない」	M：マップに現在地と部屋に2個扉があることを絵に示して教える。 J：自分の持っている盤に書かれている絵を本人に読ませカードを確認する。	わからず、扉の数＝部屋の数と思い、シールを貼ろうとする。	1 日目ミーティングできていることを大胆にほめる。できたことも大胆にほめて、モチベーションを高める。

2日目

- 1 起床
- 2 朝食
- 3 じゃんぼタイム⑥
(うた、今日の日程について話し合い)
- 4 じゃんぼタイム⑦(出発準備)
- 5 バス移動
- 6 レストランにて昼食
- 7 買い物(夕食の材料)
- 8 自由散策(選択して行動)
- 9 バス移動
- 10 じゃんぼタイム⑧(夕食準備、調理)
- 11 じゃんぼタイム⑨(お風呂掃除)
- 12 じゃんぼタイム⑩(簡単なゲーム)
- 13 夕食
- 14 じゃんぼタイム⑪(花火)
- 15 入浴・就寝

3日目

- 1 起床
- 2 朝食
- 3 じゃんぼタイム⑪
(スタンプラリーについての説明)
- 4 じゃんぼタイム⑫(スタンプラリー)
- 5 昼食
- 6 じゃんぼタイム⑬(工作)
- 7 またねの会

2泊3日で行った、今回のサマーキャンプにおいての主な日程・内容については上記の通りである。

活動については今回の総合進行、遠軽町発達支援センター山田順子指導員のニックネーム「じゃんぼ」を用い、参加児童が内容について見通しを持ちやすいように「じゃんぼタイム」という名で統一して行った。

内容については、社会性の向上を念頭に取り組みを考えていった。子どもたち同士のかかわりはもちろんのこと、大人とのかかわりや、公共の施設や交通機関の利用、調理(図28)を含め多くのことを経験していけるように配慮していった。また、各じゃ

んぼタイムにおいて、それぞれ担当を決め、担当者を中心に内容を考え、教材・教具等、参加児童がわかりやすいように事前に準備し取り組んでいった(図29)。



図28 調理での様子



図29 工作の様子

3日目に行ったスタンプラリーでは、参加児童たちが昼食の食材を集めるという目標に向かって取り組めるようにした。具体的には獲得した食材をそれぞれが持ち寄り最終的にみんなで協力した結果、昼食の食材が全て集まるということにした。このスタンプラリーには参加児童の兄弟も一緒に参加している。手順を示したスタンプカード(図30)を用意し、場所を写真入りで明記していった。また、それぞれの場所ではミッションカード(図31)を用意し、そこに書かれている内容を行うとポイントがもらえるように準備した。

このスタンプラリーには、手順書を見ながらの行動、人とのやり取り、友達との協力、各ミッションにおける実態に合わせた個別の取り組み等を盛り込んでいる。こういったことから、活動を通して、多くの経験を積むことができたと考えられる(図32)。



図30 スタンプカード

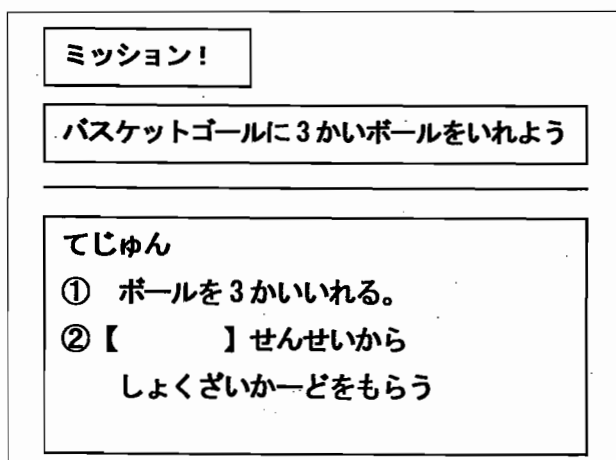


図31 ミッションカード

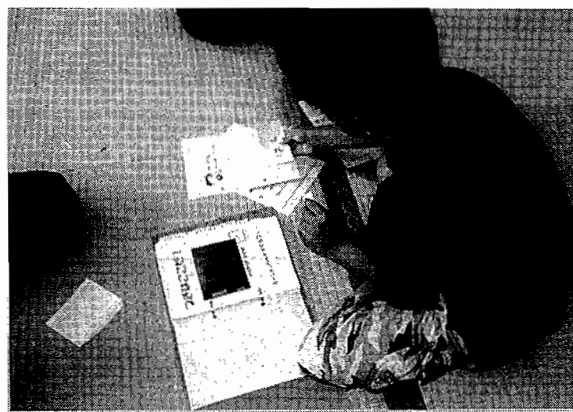


図32 スタンプラリーの様子

(6) 提示方法

3日間を通して各活動を参加児童に伝えていく方法として、しおりとホワイトボードを活用していった。しおりには持ち物、参加者、宿泊施設の地図、3日間のスケジュールはもちろんのこと、子どもが困った際のサインの出し方等々記載されており、また、サマーキャンプ中に随時必要な事柄を書き込んでいけるようにしていった。1日の終わりにはその日の出来事等を記載し、次の日の確認をしていくようにした。このことにより、参加児童は、不明な点等があれば、しおりで確認することができるようになってきた(図33)。



図33 しおりの活用

ホワイトボードでは1日の見通しはもちろん、活動毎に方法や内容、ルール等をその都度示していった。このことにより自分たちでボードを確認しながら行動していけるようになり、効果的であったと考えられる(図34、35)。

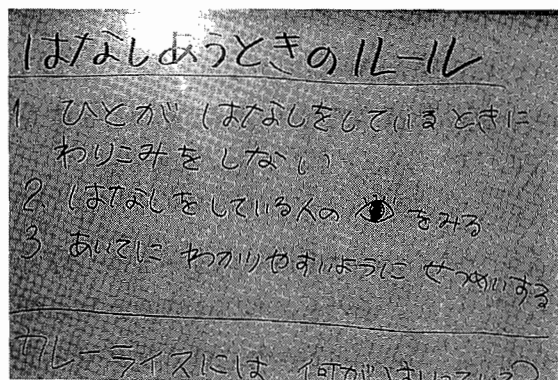


図34 ホワイトボードの活用 (ルール)

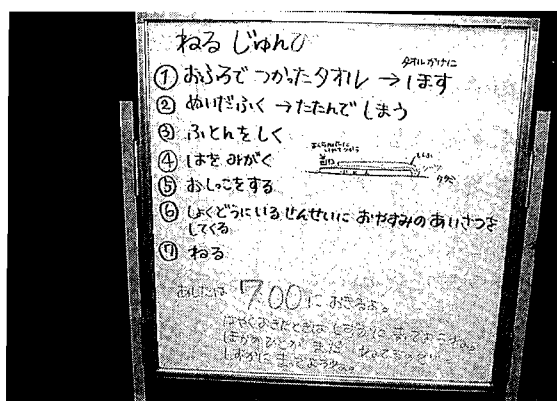


図35 ホワイトボードの活用（手順）

反面、しおり、ホワイトボードともに、参加児童への示し方について課題点があった。具体的に示す方がよい場合と簡潔に示す方がよい場合があり、内容によって工夫していくことが大切であると思われる。

(7) 修了証書



図36 修了証書



図37 参加者全員で

サマーキャンプ終了後には、この3日間の頑張りを認め、これからの生活に参加児童たちが生かしていけるように、また、達成感や成就感を味わわせられるように配慮しそれぞれに修了証書を渡した(図36)。

(8) 保護者との連携

今回のサマーキャンプでは保護者は2日目の夜からの参加であった。2日目の夜に保護者・スタッフ間でのミーティングを行い、1、2日の様子をお伝えするとともに、保護者から家庭での様子等も教えていただいた。3日目の昼食後にはメインティチャーと保護者が個別に話をし、今後の支援方法について一緒に考えていった。

(9) スタッフミーティング

毎日夜に、スタッフが集まりミーティングを行っている。全体でのミーティング後に次の日に向け、メインとサブによる担当児童についての話し合いを行った。異なる職場同士のペアとしたことにより、お互いに違った視点で考えていくこともでき、また、記録を取ることで、メインとサブの双方の力量アップにつながっていったと思われる。また、この記録(表1)をもとに子どもを真ん中に置いた話し合いを行うことができたと考えられる。

また、1日目には国立特別支援教育総合研究所の久保山茂樹先生から本人・保護者支援、各関係機関の連携等について話していただき、それぞれが研鑽を深めていくことができたと思われる。

(10) 考 察

サマーキャンプ終了後、参加児童の保護者の方から「子どもがこのキャンプを支えています」といった話をいただいた。今回のサマーキャンプでの経験が、生活面、学習面において少しずつではあるが自信につながっていると思われる。

支援者側の成果としては、専門性のアップとともに、このサマーキャンプを通して連携が深まり、その結果、本来の業務においても、プラスに働いているということである。つまり、ネットワークの構築

並びに特別支援学校のセンター的機能を考えていく上でも大切な取り組みであったと思われる。

また、多職種の者が複数の目で子どもを見ていった結果、子どもに対しての「共通の見立て」ができてきたと考えられる。こういったことを今後、実際の場面において生かしていき、具体的な指導・支援の手立てにつながっていくことができれば、生きた専門家チームになっていくと思われる。そういったことから今回の取り組みを通して、その素地ができたと感じている。

第4章 まとめと今後の課題

1 研究のまとめ及び今後の課題

本報告は「地域のニーズと資源に応じた特別支援学校のセンター的機能の在り方に関する研究」について考え、実践を通して研究を進めてきたものである。特に昨年度行った研究考察から研修活動、有志による学習会等を中心に研究を行った。

また、遠軽地区の情勢を考え、センター的機能の一部を通して地域の専門性の向上につなげていけるように、そして、関係機関同士のネットワークの構築について取り組みを通してベースを作っていけるようになってきた。

ここでは、これまで述べてきた考察をもとにして、子ども・保護者を支えていくネットワークについて考察していく。

(1) ネットワークの構築について

昨年度の研究で、「就学前に関しては発達支援センターが中核であり、保健師がキーパーソンとなっている点、また、就学期に関してはセンター的機能という点も踏まえ、特別支援学校が中心的な役割を担っていくことが大切であり、連携しながら取り組んでいくことが必要なことであろう」という考察を行った。

今回の有志学習会やサマーキャンプではその中核となる発達支援センター指導員や保健師と一緒に行うことができた。

その結果、発達支援センターと合同での支援活動

の増加、また、特別支援学校のセンター的機能の一つである「福祉、医療、労働などの関係機関等との連絡・調整機能」についても今まで以上に幅の広がりが出てきている。人と人とのパイプからはじまり、組織と組織のパイプへとつながっていったと思われる。

こういったことから、有志学習会やサマーキャンプを通して確実にネットワークの構築につながってきていると考えられる。

(2) 地域に向けた研修活動について

本校では今年度地域に向け2度の研修会を実施している。また、有志による学習会も行っている。先に考察したアンケートの結果からも、この地域において研修活動が求められていることがわかる。

これに関連して、昨年度の研究において以下のような考察を行った。

「盲・聾・養護学校が子ども一人一人のニーズを踏まえ、個別の指導計画や個別の教育支援計画に取り組み、一人一人から発想した教育活動を展開してきた。つまり、障害の特性を踏まえ、個々の実態を把握し、発達段階にあわせたアプローチを行う、このことは、盲・聾・養護学校おける専門性であると考えられる。また、社会自立に向けた取り組みや、就労を視野に入れた取り組みに関してもこれまで積み重ねてきたものがあり、こういったことも盲・聾・養護学校の専門性でもあり財産であると思われる。

以上のようなことを踏まえ、盲・聾・養護学校がどんなことを行えるか考えた時、学習をするために必要な準備、いわゆる学習レディネスについては、専門性が発揮できるのではないかな。もちろん具体的な指導方法について一緒に考えていくことも忘れてはならない。

そして、将来的な社会自立も視野に入れ児童生徒の実態を把握し必要なプログラムと一緒に考えていきながら提示していき、それを各学校においてそれぞれの専門性を発揮しながら工夫し活用してもらおう。こういったことが今後大切になってくる点であると思われる。

支援は「障害」への対応策ではなく、「一人一人

への向き合い方」が大切である3)。盲・聾・養護学校と小・中学校等がお互いの専門性を吸収しながら、ともに向上し、子ども、保護者のために取り組んでいくことが極めて重要なことであると思われる。」

今年度行ったアンケート結果において、今後期待される研修内容として、「具体的な指導・支援方法について」、「教材・教具について」の要望が多く、実践的なことが求められていることがわかる。昨年度の研究の考察にもあるとおり、今後ますます、特別支援学校の専門性を生かした研修内容を吟味していく必要があると思われる。

(3) センターの機能について

本校は、教育相談支援活動においては教育相談・支援部を中心に取り組んでいる。同時に小中高の各学部、校内の各分掌においてもそれぞれの活動を通してセンター的機能を行っている。一例として長期休業中における地域の障害をもったお子さんを対象とした学校開放事業、定期的に行われる小中学校との交流学習並びに地域の方々との交流等々、こうした従前から取り組んでいた教育課程がすでにセンター的機能へとつながっていくことも多い。

昨年度の研究において「外への支援の充実のためには内の充実、つまり自校の充実も忘れてはならない。個別の指導計画、個別の教育支援計画を中核とし、学習したことが学校生活並びに日常生活や将来において活用していけるように配慮していきながら、自校における教育課程を考えていくことが大切で、小・中学校への支援にあたるための基盤ではないだろうか」という考察を行った。

センター的機能の充実を考えていく上で、自校の教育課程の充実は欠かせない点であるといえる。そのためにも、本校において日々研鑽を深めていくことはもちろん特別支援学校と小・中学校、福祉機関等々がそれぞれの専門性を吸収しながら、ともに向上し、子ども、保護者のために取り組んでいくことが極めて重要であると思われる。

(4) 今後の課題

今回、研究の一環として行ったサマーキャンプ、

そして有志学習会並びに本校における研修会等について、今後も継続していくことが大切であると思われる。サマーキャンプ、有志学習会は多職種から構成されている。転勤を伴う場合、地域に密着した取り組みを長期間のスパンで継続して取り組んでいくことが難しい場合も多い。そういったことから、今後継続していくために、人材の確保は大切な点であると考えられる。

同時に、人と人とのつながりをしっかりと組織と組織のつながりへと発展させていくことが、大切であると思われる。

(5) 最後に

今回の取り組みは、はじめからセンター的機能やネットワークを作っていくことをねらって行ったのではなく、子ども・保護者のためを考え、自分たちの研鑽を含めて行った結果が、センター的機能、ネットワークの構築につながっていったと考えられる。また、多職種が集まったの取り組みを通して、その中でお互いの専門性を確認し、吸収していくことができたと思われる。

昨年度の研究において「障害をもったお子さんや保護者の方々が社会から孤立することがなく安心して生活していけるように、盲・聾・養護学校はもちろん各学校、教育・福祉行政をはじめとする各関係機関は考え、地域全体で成長していかなければならないと思われる。」との考察を行ったが、このことは今後も大切なことであると思われる。

こうしたことから、本研究での研修活動や有志学習会、サマーキャンプ等の取り組みは、確実に地域のネットワーク、特別支援学校のセンター的機能につながっていくことができると考えられる。さらには、次のステップとして、地域全体の成長としていくことが大切であると思われる。

おわりに

この研究の機会を与えてくださった、(財)みずほ教育福祉財団並びに(財)障害児教育財団に深くお礼申し上げます。

本研究を行うにあたり、遠軽町大堀清夏保健師、佐呂間町正源美穂、今井里美、両保健師、北海道紋別養護学校ひまわり学園分校、西尾大輔教諭、福本朋子教諭、特別支援教育コーディネーター音羽孝文、岡森博宣、両教諭、そしてサマーキャンプに参加していただいたお子さんや保護者の方々、他、多くの方々にご協力をいただき、心からお礼申し上げます。また、共同研究者として遠軽町発達支援センターの山田順子指導員には多大なる力添えをいただき感謝申し上げます。

最後に、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所の渥美義賢先生をはじめ多くの先生方にご指導いただいたこと感謝申し上げます。

今回の研究において、北海道遠軽地区はあらためて素晴らしい地域であると実感しています。そして可能性のある地域と再確認できました。

日々感謝の気持ちを忘れずに、子どもたちと一緒に日々の実践を大切に、今後も取り組んでいきたいと思っています。

また、全国的に見ても同様の地域は多く、また、それぞれが独自性をもって行っていると思われます。

本研究が少しでも役立つものになればと願っています。

ご一読いただき、ご指導、ご助言並びに各学校や地域での実践等を紹介していただければ幸いです。

引用・参考文献

- 1) サマースクールネットワーク運営本部：サマースクール 2001報告集、かりん舎、2002
- 2) 仙北谷逸生：盲・聾・養護学校のセンター的機能の充実に関する研究～子ども保護者を支えていくネットワークを中心に～、平成 18 年度 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 長期研修「成果報告書」、2007
- 3) 田中康雄：軽度発達障害のある子のライフスタイルに合わせた理解と対応、学習研究社、2006
- 4) 田中秀典：夏休みの交流で自立する力を－自分たちで準備するげんきっこキャンプ、実践障害児教育、学習研究社 385、15-17、2005

資料

長期休業中における自主研修アンケート用紙

学校公開・研修会アンケート用紙

有志学習会アンケート用紙

アンケート

1 参加の方のお立場についておたずねします。○をつけてください。

- | | | | | | |
|---|----------------|---|---------------|---|---------------|
| ア | 盲・聾・養護学校教諭・関係者 | イ | 小学校教諭・関係者 | ウ | 中学校教諭・関係者 |
| エ | 高等学校教諭・関係者 | オ | 保育園・幼稚園教諭・関係者 | カ | 教育関係者（教育委員会等） |
| キ | 福祉関係者 | ク | 保護者 | ケ | 学生 |
| コ | その他（
） | | | | |

2 この研修会を何で知りましたか？○をつけてください。

- ア ひまわり学園分校からの案内で イ 所属先の掲示板等で ウ 関係者からの紹介で エ HPで
オ その他

3 遠軽・紋別地区において、このような研修会を行うことは、必要だと思いますか？
○を付けてください。

- ア とても思う イ 思う ウ あまり思わない エ 思わない

4 今後、どのような内容の研修を期待しますか？○をつけてください（複数回答可）。

- ア 特別支援教育について イ 具体的な指導・支援の方法について ウ 教材・教具について
エ 個別の指導計画・個別の教育支援計画について オ 将来の進路（就労も含む）について
カ 諸検査について キ 障害について ク 福祉関係者を講師に迎えての研修
ケ 医療関係者を講師に迎えての研修
コ 保護者・学校・医療・福祉等々、関係機関との連携の方法について（シンポジウム含む）
サ 具体的な事例会議の場として（研修の場を利用し、事例について各関係機関と一緒に考えていく）
シ その他

5 その他、ご意見やご要望がございましたら、ご自由にご記入ください。

アンケート

本日は、二宮信一先生の「支援を必要としている児童生徒への理解と具体的支援」についての研修に参加いただき、ありがとうございました。

このアンケートは参加された皆様のご意見を頂戴し、今後のひまわり学園分校における研修の内容をより一層充実させること、また、校内における教育活動等に反映していくこと目的としております。記入後は恐縮ですが、体育館入り口のアンケート回収箱にご投函をお願いいたします。ご協力の程、よろしくお願いいたします。

1 参加の方のお立場についておたずねします。○をつけてください。

- | | | | | | |
|---|----------------|---|---------------|---|---------------|
| ア | 盲・聾・養護学校教諭・関係者 | イ | 小学校教諭・関係者 | ウ | 中学校教諭・関係者 |
| エ | 高等学校教諭・関係者 | オ | 保育園・幼稚園教諭・関係者 | カ | 教育関係者（教育委員会等） |
| キ | 福祉関係者 | ク | 保護者 | ケ | 学生 |
| コ | その他（
） | | | | |

2 この研修会を何で知りましたか？○をつけてください。

- ア ひまわり学園分校からの案内で イ 所属先の掲示板等で ウ 関係者からの紹介で エ HPで
オ その他

3 遠軽・紋別地区において、このような研修会を行うことは、必要だと思いますか？
○を付けてください。

- ア とても思う イ 思う ウ あまり思わない エ 思わない

4 今後、どのような内容の研修を期待しますか？○をつけてください（複数回答可）。

- ア 特別支援教育について イ 具体的な指導・支援の方法について ウ 教材・教具について
エ 個別の指導計画・個別の教育支援計画について オ 将来の進路（就労も含む）について
カ 諸検査について キ 障害について ク 福祉関係者を講師に迎えての研修
ケ 医療関係者を講師に迎えての研修
コ 保護者・学校・医療・福祉等々、関係機関との連携の方法について（シンポジウム含む）
サ 具体的な事例会議の場として（研修の場を利用し、事例について各関係機関と一緒に考えていく）
シ その他

5 その他、ご意見やご要望がございましたら、ご自由にご記入ください。

ご協力ありがとうございました。

アンケート

本日は、北海道紋別養護学校ひまわり学園分校公開授業・研修会に参加いただき、ありがとうございました。

このアンケートは参加された皆様のご意見を頂戴し、今後のひまわり学園分校における研修の内容をより一層充実させること、また、校内における教育活動等に反映していくこと目的としております。記入後は恐縮ですが、体育館入り口のアンケート回収箱にご投函をお願いいたします。ご協力の程、よろしくお願いいたします。

1 参加された方の所属についておたずねします。○をつけてください。

- | | | | | | |
|----------|----------------|----------|---------------|----------|---------------|
| ア | 盲・聾・養護学校教諭・関係者 | イ | 小学校教諭・関係者 | ウ | 中学校教諭・関係者 |
| エ | 高等学校教諭・関係者 | オ | 保育園・幼稚園教諭・関係者 | カ | 教育関係者（教育委員会等） |
| キ | 福祉関係者 | ク | 保護者 | ケ | 学生 |
| コ | その他（
） | | | | |

2 この公開授業・研修会を何で知りましたか？○をつけてください。

- ア ひまわり学園分校からの案内 イ 所属先の掲示板等で ウ 関係者からの紹介で エ ＨＰで
オ その他

--

3 公開授業・研修会の日程についてお尋ねします。今回公開授業と講師を招いての研修会を同一の日程にしましたが、どうでしたか？○を付けてください。

- ア とてもよかった イ よかった ウ あまりよくなかった エ よくなかった
オ その他

--

4 公開授業・研修会の内容についてお尋ねします。○を付けてください。

またその理由も記入してください。

- ア とてもよかった イ よかった ウ あまりよくなかった エ よくなかった
理由

--

5 参観された授業についておたずねします。

①参観された授業は何ですか？ ○をつけてください。(複数回答可)

- ア 小学部 イ 中学部 ウ 高等部 エ 参観できなかった

② 教師のかかわり方は適切でしたか？

--

③ 児童生徒の活動の様子はどうでしたか？

--

④ 各学部のみどころについてはどうでしたか？

小学部～「最後まで自分の役割に取り組む様子や楽しんで笑顔で学習している様子」

--

中学部～「調理の材料を集めるポイントラリーを見ていただきますが、その中で生徒個々のわかり方に合わせてポイントカードやスケジュールを工夫している点」

--

高等部～「個々の課題に取り組む場面や進行カード等により進んで作業を行う生徒たちの様子」

--

⑤ その他・気付いたこと

--

6 研修会についてお尋ねします。 遠軽・紋別地区において、このような研修会を行うことは、必要だと思いますか？ ○を付けてください。

ア とても思う イ 思う ウ あまり思わない エ 思わない

7 今後、どのような内容の研修を期待しますか？○をつけてください（複数回答可）。

ア 特別支援教育について イ 具体的な指導・支援の方法について ウ 教材・教具について

エ 個別の指導計画・個別の教育支援計画について オ 将来の進路（就労も含む）について

カ 諸検査について キ 障害について ク 福祉関係者を講師に迎えての研修

ケ 医療関係者を講師に迎えての研修

コ 保護者・学校・医療・福祉等々、関係機関との連携の方法について（シンポジウム含む）

サ 具体的な事例会議の場として（研修の場を利用し、事例について各関係機関と一緒に考えていく）

シ その他

--

8 その他、ひまわり学園分校に期待すること等、ご意見やご要望がございましたら、ご自由にご記入ください。

--

ご協力ありがとうございました。

アンケート

いつも有志学習会に参加いただき、ありがとうございます。

このアンケートは参加された皆様のご意見を頂戴し、今後の有志学習会における内容をより一層充実させることを目的としております。ご協力の程、よろしくお願いいたします。

1 参加の方のお立場についておたずねします。○をつけてください。

- ア 盲・聾・養護学校教諭・関係者 イ 小学校教諭・関係者 ウ 中学校教諭・関係者
エ 高等学校教諭・関係者 オ 保育園・幼稚園教諭・関係者 カ 保健師
キ 福祉関係者（ ） ク 医療関係者（ ）
ケ 保護者 コ 学生 サ その他（ ）

2 有志学習会を何で知りましたか？○をつけてください。

- ア 案内プリントで イ 関係者からの紹介で ウ 職場の紹介で
エ その他

3 このような有志学習会は、必要だと思いますか？ ○をつけてください。

- ア とても思う イ 思う ウ あまり思わない エ 思わない

4 有志学習会が、有効であると思う点についてお尋ねします。

○をつけてください。(複数回答可)。

- | | |
|---------------------|-----------------------------|
| ア 障害の特性について、理解が深まった | イ 具体的な指導・支援の方法について、理解が深まった |
| ウ 実際の指導・支援に結びついた | エ 学校・医療・福祉等々、関係機関との連携に結びついた |
| オ 多職種の人が集まり情報交換ができた | カ 教育・福祉・医療関係者を講師に迎えての研修 |
| キ 有効であったと思う点はあまりない | |
| ク その他 | |

5 有志学習会について、どのような課題があると思いますか。

○をつけてください。(複数回答可)。

- ア 内容が具体的でない イ 実際の指導・支援に結びつかない ウ 学習会の開催日程の情報が来ない
エ 開催の日程や、開始時刻について（参加するため）の調整が難しい
オ 開催場所について、参加するのに不都合（遠隔地等）がある カ 参加者数が一定でない
キ 課題点はあまりない
ク その他

6 今後、どのような内容を期待しますか？○をつけてください（複数回答可）。

- ア 障害の特性について
- イ 具体的な指導・支援の方法（応用行動分析、動作法等々）について
- ウ 具体的な指導・支援に使われる用具（教材・教具）について
- エ 諸検査について
- オ 支援計画（指導計画）等について
- カ 教育情勢（法的な部分や動向について）についての内容
- キ 福祉情勢（法的な部分や動向について）についての内容
- ク 将来の進路（就労も含む）について
- ケ 教育関係者を迎えての研修会
- コ 福祉関係者を講師に迎えての研修会
- サ 医療関係者を講師に迎えての研修会
- シ 保護者・学校・医療・福祉等々、関係機関との連携の方法について（シンポジウム含む）
- ス 具体的な事例会議の場（ケース会議）として（事例について各関係機関と一緒に考えていく）
- セ その他

--

7 その他、ご意見やご要望がございましたら、ご自由にご記入ください。

--

ご協力ありがとうございました。

本書は、(財)みずほ教育福祉財団の
助成を受けて、刊行したものです。

特別支援教育研究論文 — 平成19年度 —

地域のニーズと資源に応じた特別支援学校の
センター的機能のあり方に関する研究

平成20年3月 印刷

平成20年3月 発行

編集・発行 (財)障害児教育財団
横須賀市野比5-1-1
国立特別支援教育総合研究所内
